

## ティーチング・ステートメント

所属 横浜商科大学商学部

名前 榎本 真俊

作成日 2020年9月14日

### 【責任】

商学部商学科に所属し、情報科学の専門科目であるソフトウェアや通信工学の分野を中心に研究および教育活動を行っている。教育活動は主に、「インターネット技術研究」「ビジネスとAI」「情報システム設計」「データサイエンス入門」など、またゼミ生の学習支援を行っている。

### 【理念】

知識とは個々の要素が独立して存在しているわけではなく、知識同士の連続性や体系が存在している。また、自己の考えを表現するためには、体系化された知識や知識の連続性を理解しなければ誤った知識に基づいた表現や、表現そのものが表面的なものになってしまう。この場合、相手と議論している際に自身の主張が弱くなってしまい、自身の意見や考えを相手に正しく伝わらない。結果として自己肯定感が低下してしまう。

また、個々が有する知識やその理解度、技術には差があり、個々それぞれに指導や補助の量や質や異なってくるはずである。これを均質化しようとしてしまうと、知識や技術を有する学生は物足りなく感じてしまい、知識や技術が足りない学生は進度に追いつかないという事態になってしまう。

私自身の理念を上記の理由から、1. 知識の連続性の理解 2. 体系的な知識の獲得 3. 得られた知識を用いた表現 4. 個々の興味と進捗に応じた学習の実施とする。

### 【方針・方法】

上記理念を実現するために、所属校では1.を達成するために、「授業を振り返りの共有」を実施し、2.と3.を達成するために、「理解と表現の重視」を実施する。4.を達成するためには、「全体への補助と個々の学生への補助」を実施する。これら私の教育の方針としている。

#### ● 授業の振り返りの共有

毎授業の終了時に、授業や課題を取り組んだ結果として自身が理解できなかった内容や疑問に感じた内容について学生自身に自己評価を行ってもらうことで振り返りを行う。その結果を回収し、次の授業前に出た内容について、再度説明を実施、またはコメントを入れることで理解を促す。また、他の学生の振り返りを共有することにより、自分自身が理解していたと思っていた内容についてもその理解が正しいのか検証することができる。さらに、理解できていないのは自分だけではないということを共有することができる。

#### ● 理解と表現の重視

課題やテストにおいて、学生自身の有する知識量を測るためには、選択問題や単語を答えさせる方法は有用である。一方、これらの方法では学生自身が体系的に知識を得られているか、また得た知識の概要の説明やその知識を応用して他の事象について考えることができるかについて測ることができない。そこで、課題では知識の概要を説明させる、またはその知識が応用されている事例の調査を実施し、テストにおいてそれらを複合した回答をもとめる形にしている。

- 全体への補助と個々の学生への補助

技術の習得のためには、繰り返し行うことが重要である。ただし、どの程度繰り返すことで技術が習得できるかは個々の知識や経験に依存する。情報科学の基礎教養においても、典型的な型の種類は多くないが、それらをどのように組み合わせれば目的が達成できるかを考えることは知識や経験の寄るところが多く、結果的にどれだけ数をこなしたかが理解と表現に直結する。

このとき、集団で知識や技術を表現する場合に、複数人でこれを達成しようとする、技術や知識をより多く有する人間に作業が集中してしまう。つまり、知識と経験を持つ学生は更に知識と経験を得て、知識と経験がない学生はその機会を失うことになる。これにより、更に学生間の知識や経験の差が広がってしまうため、技術を習得が求められる講義においては、個人で作業を実施する必要がある、教員は個々の学生の進捗や有する知識や技術に応じて指導や補助を実施しなければならない。授業においては、各単元の到達目標を明示し更に追加として全体としては到達する必要はないが、個々で追加課題を設定する。また、ゼミにおいては、事前に自分がどこまで達成したいか、どのように学習を進めていくか学生個人で計画し、それについて助言や補助を行う。

【評価・成果】

- 授業アンケートの評価

【目標】

- ゼミに所属する学生がイベントやセミナーなどに参加する（2020年3月）
- ゼミ所属の学生とともに外部組織との共同研究を実施する（2021年3月）
- ゼミに所属する学生が対外発表を行う（2022年3月）